

アメリカに於ける最近のイエイツ研究について¹⁾

小林 万 治

イエイツの研究が軌道に乗ってから四半世紀あまりのあいだに、アメリカの学者たちがはたした役割は非常に大きい。かりにその時期をごく最近の三年間、つまり1963年以降ぐらいに限ってみても、アメリカの学界から出版された書物のなかには、まず *A Concordance to the Poems of W. B. Yeats* がある。これはコーネル大学で、電子計算機を使って編纂され、S. M. Parrish を general editor とする Concordance 制作計画の第二冊として、Matthew Arnold の詩の索引に次いで発刊されたものである。

「一ばん肝じんな言葉は落されている」などという意地の悪い批評も専門家の一部にはあるようだが、これが研究者に与える便宜は、殊更にのべるまでもない。これと同じ時期に出たのが、Helen H. Vendler の *Yeats's Vision and the Later Plays* である。著者はまだ若い女性で、Oxford にしばらく留学していた期間に書き上げたそうだが、実際の研究は Harvard での学生時代に根ざしている。難解なことで定評のある *A Vision* をまことに手際よく解説しているものとしてはほかに例がなく、文章も実に読みやすい。*A Vision* についての読み方にもとずいた後期の芝居の解釈には、いささか疑問もないではないが、この本が今後ますます声価のあがるものであることはまず間違いない。

この翌年には、かつて *W. B. Yeats: Self-Critic* (1951) を書いて、イエイツ研究家に既になじみのあるカリフォルニア大学の Thomas Parkinson 教授が、最初の著書で使った方法を後期の詩にあてはめて、詩法や創作過程を解明した *W. B. Yeats: the Later Poetry* を公にしている。自分も詩を作る人の著作であるだけに、読みごたえのあるものと思う。このほか

に大部なものとしては、Thomas Whitaker の *Swan and Shadow*²⁾ と、Edward Engelberg の *The Vast Design* とがある。Whitaker の著書には、詩の解釈などに由来する難点もあるようだが、Engelberg の書物は、今までなおざりにされ勝ちだった散文に注意を向けた、いわばイェイツの芸術論の研究として、空所を埋めるものであろう。

65年になると、さすがに生誕百年祭ということもあって、イェイツに関する研究の発表は一だんと活況を呈する。このうちアメリカ関係の単行本のみを列記すると、Curtis Bradford の *Yeats at Work*, Leonard F. Nathan の *The Tragic Drama of William Butler Yeats*, あるいは Alex Zwerdling の *Yeats and the Heroic Ideal* などがある。このうち *Yeats at Work* は、イェイツの詩の草稿に目を通して、詩人が創作の過程でどのような改筆を重ねていったかを示してくれる意味では、さきに Oxford から出版された Jon Stallworthy の *Between the Lines* (1963) と並んで、貴重なものである。あとの二冊は、アイルランドの David R. Clark による *W. B. Yeats and the Theatre of Desolate Reality* (1965) や、Oxford から出版された S. B. Bushrui の *Yeats's Verse Plays: the Revisions 1900-1910* (1965) などからもうかがえるように、最近とみに関心のたかまっている詩劇の研究においても、アメリカの学者が業績を積んでいることを示している。Russell K. Alspach の労作である劇作品の *variorum* 版 (1965) も、この風潮を更に強めるものであろう。このほか、出版年度は66年となっているが、既に65年末には店頭にあらわれていたと記憶する *W. B. Yeats and Georgian Ireland* も、やはりアメリカから生れたものである。

こんな風にざっと数え上げてみると、63年から66年初頭の三年間だけでも、十冊ちかい単行本の研究がアメリカの学者の手になっているわけで、アメリカにおけるイェイツ研究が如何に活発であるかは、疑問の余地がない。少し年代をさかのぼると、二冊の著書でイェイツ研究の最高峯の一人

と目される Richard Ellmann, あるいは詩と芝居との両方について、欠かすことの出来ない *Prolegomena* を作った George Brandon Saul, 多年の努力を詩及び劇作品の *variorum* 版の編纂に傾むけた Russell K. Alspach, 書誌や書簡集の編集その他で知られる Allan Wade などのほか、アメリカに於けるイエイツ学者の数は多い。思いつくままに名前をあげると、John Unterecker, Donald Stauffer, Vivien Koch, Hazard Adams や、既に故人となった Virginia Moore などは周知の人達で、比較的あたらしい学者の中には Morton I. Seiden や B. L. Reid などもある。Hugh Kenner などの、すぐれた論文の著者達は、枚挙にいとまがない。これに対してイギリス或はアイルランドなどの学界で著名な学者としては T. R. Henn, A. N. Jeffares, F. A. C. Wilson, Peter Ure, Frank Kermode などがあるわけだが、こうした主だった人達を除くと、イエイツ研究の相当な部分がアメリカの学者によって成されてきたことが明らかであろう。

それならなぜ、このように活潑に多彩なイエイツ研究がアメリカで進められて来たのであろうか。おそらくその一ばん大きな理由としては、やはり大学の数が非常に多く、それにともなって修士論文や博士論文を書く学究の徒の層が厚いということがあげられよう。事実、博士論文がほぼそのままの形で刊行されたものもいくつかある。しかしそれだけではなしに、高等学校や大学の文学教育のカリキュラムにおいて、イエイツがとうぜん読まれねばならないものとされていることが、活潑な研究の基礎になっているのではないかと思われる。

たとえば詩人であり、ニューヨーク大学の中堅教授で、現代詩人論などで知られている Rosenthal が編集した *Selected Poems and Two Plays of William Butler Yeats* (1962) がペーパーバックで出ているが、これが高等学校や大学などで広く教科書として使われていることなども、このことを裏づけている。これには解説と簡単な註が付けられていて、一般の学生がイエイツの作品に親しむための、手頃な仲介の役割をはたしている

ようだ。イギリス版と割付やページ数が多少ちがうアメリカ版の全詩集なども、しきりに版をかさねているのは云うまでもない。文学を専攻している学生なら、この版を自分で持っていることが多いのだが、文学専攻ではない教養課程の学生などが、広く利用しているのが Rosenthal の撰集である。大学の文学や特に詩のコースになれば、イェイツは欠かすことが出来ない。

アメリカで如何にイェイツに対する関心が一般化しているかを証拠づけるもう一つのもは、例の *A Vision* である。このペーパーバックの普及版が出たのが1961年であった。そして現在、大学などですこしまともにイェイツを勉強する程の者なら、皆これを読むようである。どうやって読むかは人によってまちまちではあろうけれども、ほんの数年前までは、専門の学者にとっても、やっかいな、むしろ当惑を憶えさせる作品であると考えるのが大勢であったのに反して、現在ではそれほど難解なものではなく、少し念を入れて読めばよく判るし、文章もなかなか面白いものだという工合に、先生方が学生に読むことをすすめるようである。

また先程も名前をあげた George Brandon Saul が、英文学史の各時代の anthology の一冊として、*The Age of Yeats* を編集しているのが目につく。現代の英文学が後世の史家によって、果して誰の時代とされるかは、吾々ひとしく関心のあるところだが、たといアイルランドを中心とした anthology であったとしても、James Joyce も居るのであってみれば、*The Age of Yeats* などというものが、あたりまえのこととして受入れられるのも、イェイツが広く普及しているためであろう。

こうして撰集でイェイツの作品に親しみ、*A Vision* などひもとく学生ならば、絶対に欠かせないのが自叙伝である。Doubleday-Anchor からペーパーバックが刊行されたのはたしか58年であったが、最近では Macmillan と提携している Collier Books からペーパーバックが出て、大へんよく売れているそうである。いままでイェイツの自叙伝は *Autobio-*

graphies として複数になっていたが、この Collier Books edition は *The Autobiography of William Butler Yeats* (1965) と単数に改めてあり、Bryn Mawr College の女性によって十頁ほどの索引もつけられている。一体イエイツの作品を研究する場合、自叙伝を絶えずくり返して読むことが必要になるのだが、どこに何が書いてあったか見失ったようなとき、索引があれば大へん便利である。この版の索引はまだ完全なものではないが、たとえば Abbey Theatre, abstract thought, abstraction, acting といった項目が並んでいて、かなりの利用価値がある。こうしたものも、相当の部数の需要があってはじめて可能なものであろう。

ペーパーバックの話が出たついでに付け加えると、例の *The Celtic Twilight* や、イエイツがかつて編集したアイルランドの民話集なども、やはりこの手に入り易い形で再版されていて、イエイツ研究者とまではいえない学生達によって読まれているのが現状である。

このような学生達が文学を専攻し、その一部は修士から博士課程に進んでいくことになれば、やがて本格的なイエイツ研究が実を結ぶことになろう。こんな状態だから、残念乍らまだ吾国には残っている誤解、つまりイエイツなどという古くさい、センチメンタルな、そして弱々しい詩人であるかのようにきめてかかってくる無知にもとづく誤解は、まったく見あたらぬ。イエイツが現代文学の中で最も大切な一人であり、その作品はひどくむづかしいけれども、それだけにこれを理解することは不可欠であるという認識がひろくゆき亘っている。

日本から向うに行って、英文学などをやっている時、たまに日本の話をしてくれと頼まれることがある。頼んでくる相手がやはり文学に関心を持っている人の場合には、よく能についての話を求められる。日本の代表的な伝統芸術として、能に興味を持つ人が多いのは不思議ではないのだが、そんな場合でも、源をたどってゆくとイエイツにつながっていることが多い。日本流に云えば、いわゆる文学同好会のようなものなら、四五十人の

学生が集まって熱心に聞いている。しかし文学の専攻ではない、政治や経済の学生でも、イエイツのことならかなり詳しい人が多い。私の居た学校の日本語の研究室などでも、日本語の録音教材として、特にイエイツその他を中心とした英文学と日本の伝統というような話をさせられたことがあった。

このような強い関心が学校教育のレベルで見られるとすると、学園をはなれた、一般の読書人のあいだでの事情はどうであろうか。これを示す一つの尺度として考えられるのは、イエイツ関係の初版本、署名入りの献呈本、あるいは自筆の手紙、作品の原稿などに対する、いささか異常なまでの蒐集熱である。そしてこうしたものの値段が、日本の標準から見れば法外といたいほどに高い。だから古本屋をあさって、イエイツ関係の古いものを掘り出してくるなどという幸運にめぐり会うことは、まず絶無であると云って差支えない。よほど物を知らない古本屋でもあればとも角、そんな本屋などが存在し得ないまでに、イエイツ関係のものが珍重されているようである。大学の図書館などでも、初版本のまれなものは云うまでもなく、24年にニューヨークの Macmillan 社から出た作品集のセットや、38年版の *A Vision* のようなものまで貴重品室に入れて、館外への借出を許さないところがある。もっとも最近再版されているものはかなり豊富に出廻っていて、たとえば、*Essays and Introductions* などは、ひとところだぶついたらしく、定価を割って安売りされていることもあった。

こうした傾向は、アメリカ人が現在世界中を動きまわっているおかげで、アメリカだけに限られたことではない。イギリスやアイルランドなどの、イエイツの本が店頭にあらわれそうな国では、どこでも同じ状態である。ダブリンにしばらく居たとき耳にしたのだが、かつて Trinity College の学生でイエイツの研究家がある。博士論文を書くためもあって、長年にわたって金にまかせて買い集めたので、Cuala Press から出たものをすべて含むという大へんなコレクションを持つにいたった。ところがこの人が、

どうした理由からかその間の事情は聞きもしたが、このコレクションを手離すことになった。このことが一部の人の耳に入ると、アメリカの蒐集家なら三倍ちかい金額を喜んで支払うであろうけれども、これだけは是非ともアイルランドに残したいといういわば愛国的な動機から彼を説得して、けっきょくダブリン市の図書館が買上げることになったのだそうである。五六百点あるコレクションで、たしか総額は6,500ポンドということだったから、円に換算すると相当の金額だが、これでイェイツの母国にふさわしい蒐集が、海外に流れずにすんだ訳である。このなかでもっとも価値のあるのがごく初期の習作とも云える劇詩 *Mosada* (1886) の、*Dublin University Review* からの抜刷で、アメリカあたりで市場に出れば、千弗は優に越すものだ³⁾そう。私はこの話を舞台うらで活躍した人や、前の持主の友人などから聞いて、ぜひ見ておきたいと思い、市の図書館に出向いたところ、貴方は新聞記者ではないか、若しそうなら未だ現物は納入されていないのであまり話が公になるのは困るのだが、と念を押して素性をたしかめられたりした。ついでに付記しておく、ダブリンの National Library と Trinity College の図書館には、作品の諸版がかなりよくそろっているようだけれど、当然ながら presentation copy とか association copy といったたぐいのものはあまり多くないらしい。また Sligo では Sligo County Library の librarian の努力によって、かなり面白いものを含んだ蒐集が育っているが、規模はまだまだである。Manuscripts では、Mrs. Yeats が所蔵されていた物の一部を National Library に寄贈されたので、これと並んで、今度ダブリン市の図書館が手に入れた蒐集が、アイルランドにおける公の文献資料の双壁ということになるのであろう。

話をアメリカに戻そう。文学的な興味からイェイツの作品に惹かれ、詩人の業績を見究めることに努めている吾々にとって、署名入りの本や初版本が、まれであるために取り合うという傾向は、それがすさまじいものであればあるほど、いささか邪道に思える。しかし実際には、学問的な興味

と好事家の道楽とのあいだに、はっきりと線をひくことはむずかしい。草稿や未発表の手紙のような場合には、よけいにそうである。たとえそれが道楽であったとしても、やはりイエイツ熱の反映であることには変りあるまい。だからイエイツ流行の尺度として、もう二三の例をあげてみよう。ニューヨークの近代文学関係の古本屋で、もっぱら各大学図書館の稀覯書部や個人の蒐集家と取引しているある有名な店のカタログが手許にある。この中で一寸めづらしいものの一つに、イエイツが呪術や占星術の興味をわかった叔父 George Pollexfen に贈った作品の一揃がある。G. Pollexfen は1910年に亡くなっているし、それに先立つ数年のあいだは、二人の仲が多少疎遠になっていたらしいから、これらの作品はみな初期のものばかりで、*Poems* (1895) をはじめとして、*The Secret Rose* (1897)、*The Ideas of Good and Evil* (1803) などを含む六冊である。それぞれにイエイツの献辞が書かれていて、売価は1,800 ドルとなっている。これがはたして本屋の希望するようにまとまって講入されたか、それともばらばらに数人の所有に帰したかは、残念ながら知らない。これより半年前のカタログで、驚くほど高価に値ぶみされているものに“*The Folly of Being Comforted*”の自筆原稿がある。これが初期の十四行詩として、575 ドルなどという値段になるのは、自筆、署名入りで、保存の状態が良く、しかもペンと鉛筆による訂正があれこれと書込んであって、出版された形とはかなり異った行があることによるらしい。こうした草稿が一体どうしたいきさつから市場に流れるのかは知る由もないが、まだ多量にイエイツ夫人の手許に残されている原稿やノートの類が、将来どこに落着くことになるのか、吾々ひとしく興味のあるところである。

もう一度、作品研究の分野に立帰ろう。大学の undergraduates として文学をべんきようし、やがて大学院に入って来れば、学問的な研究の入口に達するわけだが、こうした学生達は、いざ論文の題目を撰ぶという段になって、イエイツにどんな反応を示すであろうか。まず云えるのは、現代

文学の大物はなかなか手軽にあつかえるものではなく、特にイエイツなどはむずかしいということ、彼等が身に沁みて知っていることである。たとえば過去の二十年ぐらいに亘って、イエイツに関する修士論文がどんな工合に書かれているかを、二つの大きな大学院でカードをめくって調べてみると、最近の数年間、論文の数がかなり減っているのが目立った。はたしてこれが普遍的な傾向であるかどうかは断定できないが、イエイツはなかなかむずかしくて、短い期間にまとまった仕事をするのは容易でないということが、常識になってきた結果ではないかと推測される。もっとも、現代詩の講義は各大学でかなりあるし、イエイツだけを扱うコースも相当ふえて来ているようだから、term paperなどでイエイツについて書くことは、反って多くなっているのは云うまでもない。

だが、博士課程になると、様子が一変する。ここでは、現代文学の学生にとって、一ばん魅力があるのがイエイツとジョイスなのだそうで、その理由は、手強いからこそそれだけにやり甲斐がある、というところにあるらしい。A. N. Jeffares と K. G. W. Cross が共同編纂した百年祭記念出版の *In Excited Reverie* (1965) のなかで、批評および研究の概観を書いている Cross は、その文章にイエイツの詩のタイトルを借りて “The Fascination of What’s Difficult” と題しているが、まさにこの困難なものを持つ魅力が、多くのイエイツ研究家を虜にしているのだと云えよう。ただイエイツもジョイスも、かなりの研究が進んでいるわけだから、博士論文を書いて学位を貰い、しかもそのあと、その論文が出版されるような価値のものであることを希うとすると、いきおい重箱のすみをほじくするような研究になり勝ちである。この弊害はすでにかなりはっきり出ていて、だからイギリスの学者などが、アメリカにおける博士論文の「乱造」制度を批難したりすることになる。

しかし他方、ながい年月をかけなければ本格的な規模の研究は出来ないが、かと言っていたずらに細部にのみ入り込んでしまう危険はさげなければ

ばならないという自覚もみられる。面白いと思った論文の一つに、*Yeats Dictionary* というのがあった。これは作品に出ている地名、人名を主として、そのほか特殊な用語や概念について、作品に副って解説をほどこし、参照すべき個所を明示した辞引である。伝聞したところによると、論文の審査に立会ったある外国文学の教授が、英文学の教授達に、貴方がたのところでは、こんな傾向のものを博士論文としてどうお考えですか、と質ねたところ、吾々はこのごろ小ざかしい理窟をふりかざした批評には、いささか食傷ぎみなので、こうしたものの方がかえって意味があると考えています、と応えたそうだ。この辞引が、やがて出版される運びになるかどうかは知らないが、はじめ不詳となっていた *Sato's sword* の佐藤醇造氏のことなども、日本人の図書館員の協力によって説明がほどこされている。

また、アメリカに居ることが地の利を得たことになる研究に、John Quinn (1870-1924) と Yeats や Lady Gregory などの関係をしらべたものがあった。John Quinn はアイルランド系のアメリカ人で、ニューヨークで弁護士として産をなした。現代文芸に深い理解を示し、Metropolitan Museum of Art の終身名誉会員に推されたりした人で、その蔵書や美術品の蒐集でも知られている。Ezra Pound が大幅に手を入れて短かくしてしまった以前の“*The Waste Land*”の失なわれた草稿が、Eliot から送られたのもこの人だが、アイルランドの文芸にとっては、殊に貴重な patron であった。イェイツ父子が彼と知り合ったのは1901年のことで、それ以来ごく密接な関係が続いたことは、Allan Wade 編纂の *Letters* に収められた Quinn 宛の手紙や、J. B. Yeats の手紙その他からもうかがうことが出来る。ところで Quinn 自身の日誌やメモなどは、遺言によって一行たりとも印刷に付することを禁じられているのだが、そのほとんどが現在 New York Public Library に所蔵されていて、免読することは出来る。また Lady Gregory の journals その他の大量の資料も、二年あまり前にやはり New York Public Library の Manuscript Division が買い込ん

でいる。こんな風に、イェイツ自体からすこしそれれば、まだ未開拓の分野がいろいろ残されている訳である。

一般に敬遠されているらしいのは、何かのテーマを探してきて、そのテーマで作品全体を割りきって説明しようとするやり方である。これでは筋を通すことが主体になって、内容に無理な歪が出来てしまう。一体、イェイツの作品は、全体が密度の高い構造物のようなもので、一つの詩はそれを含む本一冊から切り離して読まれ得るものではなく、また一冊の本は、他の作品によって照らされ、支えられねば十二分に理解できないという考え方は、Hugh Kenner が “The Sacred Book of the Arts” という文章で強調し、その後 John Unterecker によって発展させられたものだが、これが今日では、研究者の間で常識になっていると云ってよい。だから結論が先に出来あがっていて、そのために作品の解釈がわん曲されたり、せまく限定されるような研究は、影をひそめるのであろう。こうしてイェイツ研究は、ますます本腰を入れ、時間をかけないと出来ないものになってくる。

それでは、博士課程の学生や、あるいはそれ以上に進んだ研究者たちが、現在とくに直面している難関とでも云うべきものは何であろうか。これはもちろんアメリカに限らず、アイルランドでもイギリスでもあてはまることだが、それには、いわゆる未発表資料の利用にかんする行きずまりがある。今まで先駆者的な役割をはたして来た学者たちの大部分は、イェイツが残した大量の未発表の文章やノート、詩の草稿などをいろいろに使って本を書いてきた、という傾向がある。Ellmann にしても、伝記を書いた Hone にしても、Parkinson や Virginia Moore、あるいはより最近では詩の草稿を研究した Stallworthy や Bradford など、みなそうである。もちろん材料があって、それを探し出したから本が書けた、などという意味ではなく、目の付けどころ、利用の仕方が良かったからこそ、彼等の研究が価値を持っているのは云うまでもない。おかげで未発表の資料の多くが、

一般の目にふれることにもなった。しかしこうした材料を利用できたことが強味であるのもまた否定できない。ところが最近では、これがだんだん出来なくなっているようである。何故やりにくくなったかと云うと、一つには利用できるものが底をついてきたこともあろう。しかしそれ以上に、こうした資料が、ますます近ずぎにくくなったのである。市場にながれたものは各地に散って蒐集家の許におさまり、免読研究の便が尠ない。イエイツ夫人の手許にあったものの一部が、アイルランドの National Library に寄贈されたことは既にのべたが、その残りの部分については、かつてのように比較的自由に接近することが出来ない。イエイツ夫人は相当のご高令で、お体も悪く、人と会うのが大儀であるからという理由で、近頃ではほとんどのイエイツ研究家に門が閉されてしまった。二十数年にわたって、何百あるいは何千という人たちと会い、協力を惜しまなかった夫人が、いつまでも亡夫の名声に奉仕して生きることにつかれてしまわれたとしても、むしろ当然である。だがそれにもまして、細心に整理され、管理されて来た資料の利用のされかたに、好ましくない面があったようである。たとえば五十年代のはじめに、あるアメリカの学者が、とじ合わされた草稿をばらばらにしたり破ったりしてアメリカ人全体の信用を落し、そのためアメリカの学者は一さいお断りという状態がしばらく続いたこともあったと聞いている。

そのほかに未発表ではないけれども、かつて出版されてのち、長いあいだ絶版になっていて、そののち一向にまとまって出ることのないものがある。古いものでは、たとえば The Pseudonym Library の一冊であった *John Sherman and Dhoya* (1895) や、各種の雑誌への寄稿や、他人の著者に書いた序文、あるいは1925年版の *A Vision* のようなものすら、手許に持っていて参照するということはなかなか難かしい。このために Macmillan 社などを批難する声も一部にはあるようで、背後の事情は判らないが、なんとか改善されて欲しいところである。

手紙類などについても、似たようなことが云えよう。Allan Wade 編纂の *Letters* は、千ページに近い大冊で、それに付けられた解説も立派なものだと思し、主なものはほぼ収録されているとも考えられるが、しかし未だ印刷されていないで、所在の判っているものも相当の数にのぼるようだ。恐らくあの書簡集とほぼ同じくらいの量が、各地の蒐集家の手許や図書館にある筈だという意見もある、いずれにしても、それらがまとめられて、さらに完全な書簡集が出来ることは、研究者の切に望むことで、いずれは改訂版が発刊されることになろう。以上のべて来たような資料の利用面における中途半端な状態が、本格的な研究にたずさわる者の仕事を、困難にしている。

だが、これよりももっと本質的な問題がある。最近の五・六年間をふり返ってみると、いままでなおざりにされてきた芝居に対する関心が高まって、研究者もかなり出てきているが、これはむしろおそきにすぎたという感じがする。しかしそれが決して、詩の方は解釈に関するかぎり究めつくされたから、研究が芝居に向けられてきたというものではない。作品の研究が真儼にはじめられてから、二十年余りの才月が経つ今日に至っても、まだまだ解釈の一樣でない難解な詩がかなり残されている。ところがイエイツの作品の特徴から考えても、一部に読めない詩が存在することは、作品の全貌を見誤る結果になりかねない。こうしたことは、他の作家や詩人の場合についても多かれ少なかれ云えることではあるけれども、イエイツの場合には殊にそうである。だから何年間にもわたって、自分の読みを深め、解釈の誤りをなおしてゆかなければならないのだが、ここで研究者はつまづくのである。つまり解ったようなつもりで、あるいはそんなふりをして本を書こうとするけれども、時として自分勝手なものになってしまう。

しかしアメリカの学界を見てまず感じるのは、その奥行の深さである。若い研究者がひしめいていて、その人達の研究の成果が発表されることも多いのだが、その上には、当然この人達の論文を指導し審査する、より年

配の教授たちが居る。こうした人達の中には、すでにイエイツの権威として名の通った方々もかなりあるわけだが、それ以上に、多忙にまぎれて、長年の識見をまとめ、自分自身のイエイツ論を世に問う段階に至っていない人々が多くいる筈である。

それともう一つは、アメリカの学会における中央集権的な傾向のないことである。悪く云えば、協調性、方向性がない、ということになるのかも知れない。研究者の数が多く、方法も傾向も多種多様だから、それをまとめるという動きが出にくいのであろうか。このことを端的に示すのは、昨年の百年祭記念出版である。これに含まれる主なものは、*In Excited Reverie, a centenary tribute*; *W. B. Yeats, centenary essays* や、*An Honoured Guest, new essays on W. B. Yeats*; *The Yeats We Knew*; *The World of W. B. Yeats, essays in perspective* などであろうが、どれもアメリカから出たものではない。アメリカの学者の寄稿がないという意味ではないが、誰かが声を掛け、方針をきめて論文を集めるということを行なわれなかった。雑誌の場合には二・三そのような試みが見られたが、上記の刊行物の編者達が、それぞれ中心になって仲間を語らい、企画した跡を見ると、余計にこれがアメリカではなかったことが目立つのである。*The Yeats We Knew* などのごく薄い小冊子だが、アイルランド放送で連続してなされた講演の筆記で、これがその一年前に同じ方法でまとめられた *The Integrity of Yeats* に続くものであり、その源は1960年に発足した Yeats International Summer School にあることを想うと、イエイツ研究者の集団が形成され、内部の連繫が徐々に強まってきていることが感じられる。Denis Donoghue が International Summer School について “...bringing to focus and definition many interests which had wondered through the country, fretful and homeless, for twenty years. ...”⁴⁾ と書いているのは、まさにこのことを指しているわけであろう。

それなら、今後のイエイツ研究が、アメリカ及びその他の国において、

はたしてどのような方向に進むのであろうか。たとえば Yeats と Shelley の関係、あるいはよく判っているようで案外くわしい点の見きわめがつかない Ezra Pound との関係、あるいはルネッサンスの思想家達とイエイツというようなことになると、まだされねばならないことが残っていて、このような問題に関心を向ける動きが出てきているようだ。昨年ダブリンから出た *Yeats and Castiglione* なども一つの例である。

しかしもっと大局的に見た場合、何がのぞまれ、なされねばならないのか。まず第一に、完全な伝記が書かれねばならない。Joseph Hone のものは、一応 official biography として、長年の友人である立場から依頼をうけて書かれたものだが、せっかく自由に出来た筈の資料も十分には使いこなしていないらしいし、その上、しばしば指摘されているように、誤りが非常に多い。にもかかわらず、やはりそれなりに便利だし、とにかくこれに代るものが無いために広く利用されているのが現状である。だから誰か意欲のある博識の学者によって、より完全な伝記が公刊されることが、是非のぞまれるのである。⁵⁾

伝記とならんで欲しいものは、既にのべた書簡集である。これについては、何処にどんな未発表のものがあるかがだんだん判って来ているから、それ程むずかしいことではないかも知れない。アメリカだけに限ると、たとえばテキサス大学などが、原稿や稀覯本の講入に、きわだって大きい予算を持っていて、かなりの数をあつめているとのことである。また New York Public Library や Huntington Library, あるいは Harvard 大学や, Ellmann 教授の居られる Northwestern 大学の図書館も主だったものであろう。California 大学の蒐集や Indiana 大学の Wade Collection も有名である。個人の蒐集家の持っているものもかなりある。そのほか、印刷にはされていないながら、版權の都合などで Wade 編の書簡集には収められていないものなども一緒にした改訂版を求める声が強い。

おなじように基本的なものに、作品の詳しい commentary がある。さ

きほどもまだ読みの定まらない詩が相当にあることに言及したが、重箱のすみをほじくるような研究に無理な前提や結論が見られるのも、このことに由来する場合が多い。しかしまた他方、そのような研究もなされなければ、より正しい詩の解釈には進み得ないという事情もあることは認めなければならない。George Brandon Saul の *Prolegomena to the Study of Yeats's Poems* (1957) は、作品の詳しい研究のための大切な手引で、commentary 作りの基礎を提供してくれた。しかし発行されてからすでに十年にもなるので、一部の詩については情報が十分ではない。詩を読むことにまともに取り組んだ術のない著書としては、John Unterecker の *A Reader's Guide to William Butler Yeats* (1959) などのほかは、意外にすくない。こんなわけで、代表的な異説を並記し、引用の典拠をしめし、作品間の cross-reference なども含んだ本格的な commentary の出現がまたれるのである。前述した Rosenthal の撰集には簡単なながら註が付いているし、又イギリスの方では A. N. Jeffares の編纂した撰集にも同じことがなされているが、恐らくそれほど遠くない将来、もっと規模の大きい、しかも対象を初學者だけにかぎらない注釈書があらわれるのではないかと考えられる。私の知るかぎりでは、プリンストン大学の博士論文として、かなりの数の詩に註をつけたものが、二年余り前に出来ている。これはマイクロフィルムでしか利用できないが、内容が更に充実されれば、出版ということもあり得よう。

以上のほかに見られる傾向としては、博士論文などの指導を通して、何人かのイェイツ学者を世に送りながら、自分自身のイェイツ論をまとめるにいたらない大物の学者たちが、そろそろ動き出したらしいことである。たとえば William York Tindall は、コロンビア大学の現代英文学教授として、Virginia Moore, John Unterecker, Barbara Seward, Morton Irving Seiden などをはじめ、多数の人達の論文指導をして来たが、今までイェイツ論としては、論文が二・三篇あるのみである。ところがもう一年ちか

く前に耳にしたところでは、短かいもののだがイエイツに関する著書の原稿を、既に本屋に渡してあるそうだから、まもなく彼の長年の蘊蓄に接することが出来よう。また現在カナダの Toronto に居られる Northrop Frye にも、同じような計画があると聞いている。

ごく大まかな云い方を許されるならば、1940年代のはじめぐらいからイエイツ研究が本格的なものになったとすると、50年代に入ったころまでは、現代文学における彼の意義を考えたり、既成の誤解を正したりして、その中核をたずね、精神をとらえようとする研究態度が一般であった。ところがそののち細かい研究がだんだんと珍重されるようになって、やがてその行きすぎが目立ってきた。このことは、内容に多少の重複はあるけれども、*The Permanence of Yeats* (1950) に集められた評論と、*Twenty Century Views* の一冊としてまとめられた *Yeats* (1963) とを比較してみても判ることである。後者を編集した Unterecker 教授も、このごろは細かいことをほじくる論文が多くて、幅のある、洞察にとんだものが少なくなったという感想をのべておられた。

しかし専門家がふえ、それぞれが専門家になりすぎてしまうのも、一つの過渡的な状態としては、止むを得ないかも知れない。しかも現在は、このような傾向がまた一つの曲り角にさしかかっているように思われる。資料の利用における便宜がみたされ、基礎的な研究が集成されれば、やがて更に豊かな、より充実したイエイツ研究の時期が、あとにひかえていると云えよう。

註

- 1) 本稿は去る5月14日、立命館大学で開かれた日本イエイツ協会第2回全国大会において、同じ題名で行なった講演に、筆を加えたものである。
- 2) この標題はイエイツが Dorothy Wellesley にあてた1937年の手紙の中の一句、“double swan and shadow” に基づいているが、Wade 編の *Letters* では、この部分は“double swan [? sun] and shadow” となっている。Dorothy Wellesley 自身が自分に宛てられた手紙を編纂したとき swan and shadow とし

ていることを顧慮して、Wade は [?sun] と含みを持たしているのだろうけれども、Wade の読み方のほうが筋が通っているように思える。Whitaker はこのことを断っていないようだが、そうしたことが、彼の研究における論旨の無理を象徴しているように感じるのはひが目であろうか？

- 3) この版の *Mosada* が如何にまれにしか存在しないかは、たとえば Wade がその書誌のなかで “Yeats himself seems to have kept no copy, and there is none in the British Museum, at Trinity College, Dublin, or in the National Library of Ireland” と書いているのでも判ろう。同じ場所で “One copy is known to exist, in a private collection, in Dublin” というのが、このコレクションを指すものかどうかは知らない。なお Trinity College には、この詩の草稿がある。
- 4) *The Integrity of Yeats*, ed. by Denis Donoghue, The Mercier Press, 1964, foreword.
- 5) この話をしたあとで、近く Harvard U. Press から *Life of Yeats* という本が出ることを知った。早ければこの文章が活字になるころには市場にあらわれるであろうが、まだその内容がどんなものであるかは不明である。